

EDplace | 101

日本デザイン学会
環境デザイン部会機関誌
EDプレイス 第101号 2025年

目次

巻頭言・人と環境をつなぐまなざし ——— 1

■特集 2024年度卒業制作

————— 2-13

連載・EDeye 葛西海浜公園 キッズレンジャー ——— 14-15

投稿・石川県 能登半島地震

復興支援ガイドツアー「リポート珠洲」に参加して ——— 16-18

追悼 西川潔先生 ——— 19

事務局報告 ——— 19-20

発行日＝令和7年8月24日

発行人＝

森山貴之 t-moriyama@yokohama-art.ac.jp

編集＝

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

川合康央 kawai@bunkyo.ac.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

佐々木美貴 mikisans1@gmail.com

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局

〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町1204

横浜美術大学 教養科目

森山研究室気付

TEL 045-963-4136 FAX 045-961-7371

Mail t-moriyama@yokohama-art.ac.jp

巻頭言

人と環境をつなぐまなざし

河西大介（東京都立産業技術大学院大学）

環境デザイン部会の皆さま、はじめまして。東京都立産業技術大学院大学 産業技術研究科の河西大介と申します。本学は社会人を主な対象とした専門職大学院であり、私はここで年齢や職業をはじめ、多様な背景を持つ社会人の皆さんに向けて教育や研究活動に取り組んでいます。

私は、自然豊かな山梨県で生まれ育ちました。祖父が熱心に庭づくりに取り組む姿を間近に見て育ったことで、幼い頃から植物や石といった自然の要素に強い関心を抱いてきました。大学3年生のときに遭ったバイク事故は、私の価値観を大きく揺さぶる出来事でした。3ヶ月にわたる入院生活を通じて、日常に潜む「不自由さ」と真剣に向き合うことになり、その中でバリアフリーやユニバーサルデザインの重要性を肌で実感するようになりました。この経験がきっかけとなり、

卒業研究では「車いす利用者の都市イメージの抽出」をテーマに、車いす利用者の視点から都市空間を再考することの意義を探りました。さらに学びを深めるべく進学した静岡文化芸術大学大学院では、ユニバーサルデザインや色彩学などを学び、修士論文では「東オホーツクシーニックバイウェイにおける色彩計画の策定に向けて」に取り組み、景観と色彩の関係性に着目し、その調和や印象について考察しました。

社会人としてのキャリアは、港湾を中心とした建設コンサルタント業務から始まりました。日本各地およびアジア圏の港湾を訪ね歩く中で、会社の理念である“現場第一主義”を信条に、自分の目で見て耳で確かめた情報を重視しながら実務に向き合った後、母校にて実習指導員として着任しデザイン教育に携わる機会にも恵まれました。そして、現職に就いてからは、私自身も再び社会人大学院生として筑波大学大学院に入学し、「認知症高齢者の散歩に着目した介護サービス施設屋外環境のガイドラインに関する研究」

に取り組みました。

これまで私は、自然とのふれあいや身体的制約の体験、自ら現場に足を運び観察や体験から得た知見、そして教育・研究活動を通じて、人と環境との関係について探究してきました。特に、誰もが安心して使える環境を実現するためには、利用者の身体的・心理的な特性を理解し、それに即した空間のあり方を丁寧に捉える視点が欠かせないと考えています。関心の領域は、都市景観計画、色彩設計、高齢者ケア施設環境など多岐にわたりますが、その根底には常に「人と環境の関係性」を見つめる姿勢があります。

これからも、日々の生活の中で得られる小さな気づきを大切にしながら、人の感覚や行動に基づく環境デザインのあり方を追究し、誰もが心地よく過ごせる空間の創出に取り組んでいきたいと考えています。環境デザイン部会では、こうした研究や実践を共有しつつ、異なる視点を持つ皆さまと意見を交わせることを楽しみにしております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

2024年度卒業制作

今年もED部会の皆様に募集させていただいた卒業・修了制作が揃いました。今年度は15校から22作品が集まりました。いずれも時間をかけて丁寧に制作された力作です。卒業生・修了生のみなさまのこれからのご活躍を期待しております。ご協力いただいた部会員の皆様には、作品をご推薦いただき誠にありがとうございました。

(EDplace編集員一同)

EDplace

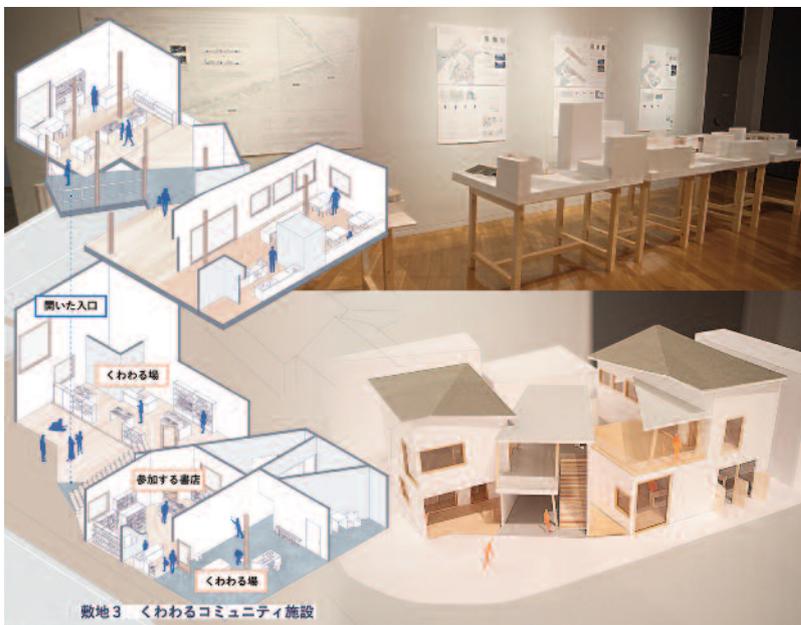
- * 大学名、学科名等の表記は、投稿いただいた原稿に基づきました。また敬称略とさせていただきます。
- * 誌面スペースの都合で、文字原稿や図版原稿を調整させていただいている場合があります。ご了承ください。

秋田公立美術大学
美術学部 美術学科 景観デザイン専攻
友杉悠葉
「跡のまち
痕跡を用いた仙台の文化的交点の提案」

本作品では、かつて城下町であった地域の過去と現在が交差する敷地に、まちの骨格を意識付ける空間が提案されている。

敷地の選定は、フィールドワークを通じて見出された細かな「痕跡」を手がかりとしている。対象地域には、現在も規格化された町割りが残る一方で、「役物」のような土地も点在している。友杉さんは、こうした土地の特殊性が都市開発の中で「痕跡」として浮かび上がっていることを、仙台の歴史に精通した方々の協力も得て、発見した。

充実したりサーチをもとに、書籍を扱う小規模施設が3箇所提案された。書籍に着目したのは、仙台藩で栄えた「書肆(しょし)」の歴史的背景を踏まえつつ、



小規模書店の減少という今日的な課題にアプローチするためである。

設計された建物の複雑な形状は、土地の履歴をボリューム構成に反映した結果である。また、内部空間は、開口部や書棚の配置を工夫することで、街道とのつながりを生み出している。こうした丁寧

な操作により、周辺のスケールに呼応しつつ、土地の特殊性が顕在化され、内部に入るとまちとの連続性が認識されるという、歴史や空間の重層的な関係を浮かび上がらせる「交点」を生み出している。
(推薦者：井上宗則)

九州大学 芸術工学部 芸術工学科
 インダストリアルデザインコース
 栗田優来
 「長距離トラックドライバーの休憩のための場の提案」

2024年以降、トラックドライバーの労働環境改善のための働き方改革法案によってドライバーの休憩は義務化された。この休憩の義務化に着目し、本研究ではトラックドライバーの休憩に関する問題点を整理し、新たな休憩施設を提案するこ

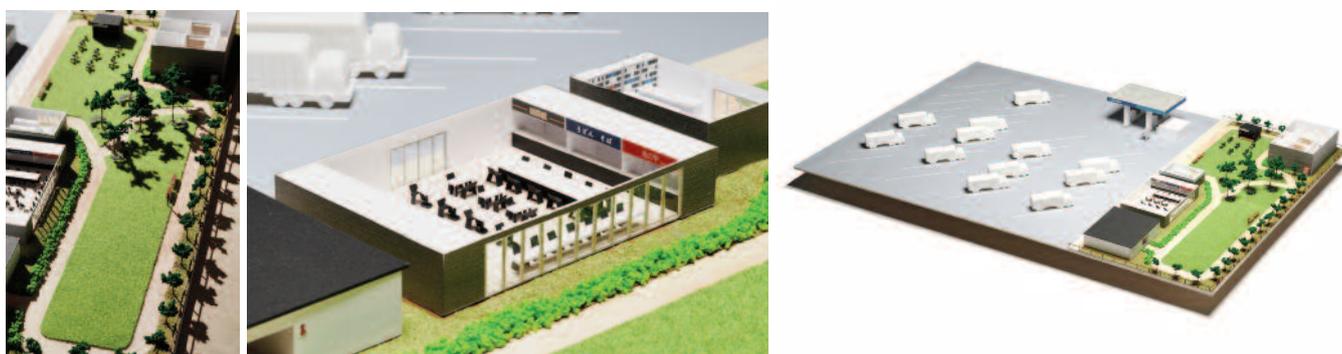
とを目的とした。

トラックドライバーの休憩に関する考え方や休憩スタイルやSA・PAの抱える問題点等の調査から「トラックドライバーが積極的にSA・PAを利用したいと思っていない」ことが抽出できたため、これを課題として提案の検討に取り組んだ。提案コンセプトを「トラックドライバーがスムーズに充実した休憩を取ることができるトラックドライバー専用SA」とし、トラックドライバー専用SA「TREST」を制作した。70m×100mの空間を1/100模

型で表現している。

運転で座りつかれたドライバーのための散歩道と、開放的な休憩ができる芝生が広がっている。仮眠場所・ランドリー・シャワー室などの長距離トラックドライバーが求める施設を設置し、開放感を求めるドライバーのために景色を見ることができる入浴施設や、大きな窓のある食堂を設け、ドライバー同士の情報交換が行いやすい座席レイアウトを検討するなど、トラックドライバーの休憩スタイルに合った休憩の場とした。

(推薦者：曾我部春香)



京都美術工芸大学
 建築学部 建築学科
 川端力斗
 「自然式」

人は自然とのつながりを求め古来より自然信仰があるが、建築はもっと自然になればより近い存在になると思う。日本はよく無宗教と言われ、それを象徴する一つに結婚式が挙げられる。様々なスタイルがあり、どれも許されている。ならば、自然信仰の結婚式・「自然式」があってもいいのではないか。自然に誓いを立てる結婚式は日本だからこそ出来ることであり、人生の節目となる新郎新婦と参列者にとって、非日常的な式場空間を自然と共にある場所にする事で、人と自然の新しい関わり方が提案できるのではないかと考えている。敷地は京都市左京区神楽岡町にある吉田山とし、結婚式は基本的に土日祝に行われ、それ以外は吉田山東側の特徴である周辺住民のための公園になる。式場は場面ごとに5棟（受



付・待合・控室・挙式・披露宴) の分棟で計画した。吉田山で感じるものの出来る自然を、空・雲・雨・風・光・山・森・土・石の要素にまとめ高さで分類し、山の頂上に向かって扱う自然を変化させる。建築と自然の移り変わりを同じ方向に重ねることで、訪問者へ直感的に自然

を感じてもらえるのではないかと考えている。壁や天井は必要最低限しか無く半屋外空間がほとんどのため、結婚式を行う時期を屋外行動に支障をきたすことのない3~5月、9~11月の結婚式における繁忙期に限定する。(推薦者：山内貴博)

「面接空間における植栽の心理的影響に関する研究」

入社面接やカウンセリングの空間は被面接者のパフォーマンスや評価に影響を与える可能性がある。リラックスして自己開示できる環境のための要素の一つとして観葉植物を取り上げ、その配置や数が及ぼす心理的効果について検証した。

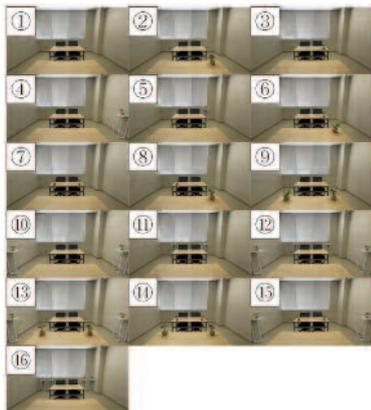


図1 植栽全配置図

大学内のゼミ室を模擬面接空間とし、植栽としてシェフレラを配置した。図1に示す全16パターンについて、大学生30名を被験者として実験を行った。被験者は当該空間を体験したうえでSD法による心理評価を行い、全条件の評価後に評価グリッド法を実施して質的な要件抽出を行った。

評価グリッド法の調査からKH Coderを用いてテキストマイニング（図3）を行い、共起ネットワークを作成した。その結果、

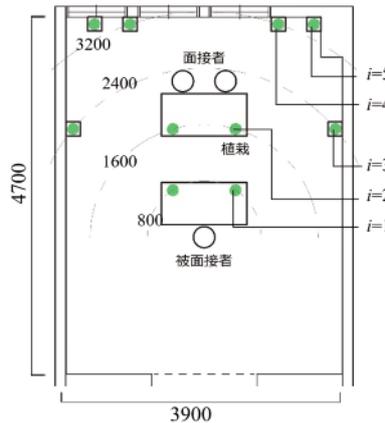


図2 本実験の配置図 (●は植栽設置の位置)

植栽の量が、集中力の向上やパフォーマンスの向上に繋がり、「空間の雰囲気」にも強く繋がっていることが見てとれた。また、被面接者の視界内の植栽は強い印象を与えると考えられる。さらに、コミュニケーションを円滑にする効果とも繋がっている。一方で植栽の配置によっては「圧迫感」を与えるリスクもあるため、適切な植栽の配置がポジティブな心理的効果を生み出すためには適切なバランスが必要である。(推薦者：土田義郎)

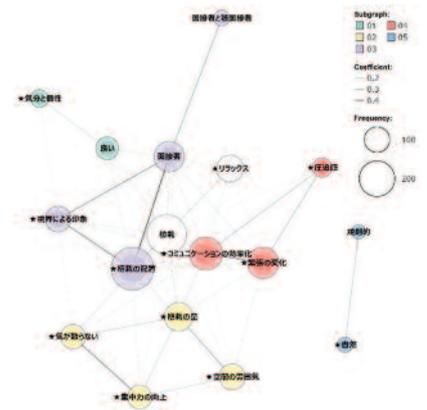


図3 共起ネットワーク (★はコーディング後の語)

「キッズパークに相応しい遊具の提案」

子供たちの外遊びに関する調査によると、近年は携帯電話やゲームの普及により、外遊びの機会は減少している。また、都心は公園自体が少ないという現状がある。芝浦工業大学豊洲校舎では校庭の一部を子供たちに開放しキッズパークとしている。日差しを遮る大屋根があり、人工芝で整えられたこの場所は小さな子供を持つ母親にも人気であるが、小さな子供でも楽しめる遊具が欲しいという要望がある。高さのある遊具は落下の危険があるため、高さを抑えた飛び石型の遊具を考えた。はじめはモルタルで造形をしようと考えたが、転んだ場合、擦り傷になる可能性がある。そこで、様々な材質を検討した結果「ポリウレタ樹脂塗料」を採用することとした。発泡スチロールの上に塗布するだけで、耐久性のあるゴ



ム質の表面となり、滑りにくく、当たってもケガをすることが少ない。造形は子供たちが自然科学に興味を持つようにラセンをテーマに貝や植物の造形を作った。1つ1つ異なる凹凸を作り、所々に内部にスポンジを入れるなどして、足の感覚を

楽しめるようにした。試作を置いて子供たちの様子を観察したところ、とても好評であった。今後もこのキッズパークの遊具の検討をしていきたいと考える。(推薦者：橋田規子)

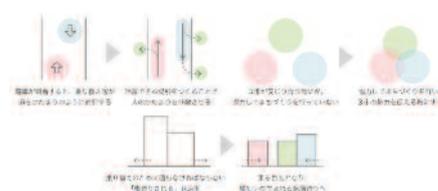
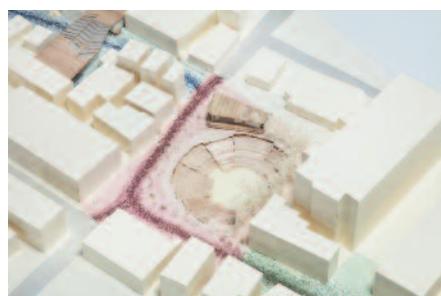
女子美術大学 芸術学部
 デザイン・工芸学科 環境デザイン専攻
 田畑伊織
 「あきつシアタープラザ
 ー秋津駅・新秋津駅間の再整備計画」

東村山市の北部に位置する秋津駅と新秋津駅をつなぐ街路や広場、地域拠点施設で構成されたまちづくりの提案である。計画地は、東村山市、清瀬市、所沢市の3市が隣接する地域にある。2駅間の駅前通りは、乗り換えのために多くの利用者が通る商店街であり、1日推定約5万人の歩

行者が通行する。しかし、乗り換え客の集中による混雑や商店街を素通りされるという問題を抱えている。そこで、作者は現地調査を重ね、乗り換え客と3市の地域住民が利用すること、および交差点をもつ街路の形状といった計画地の特徴に着目して、2駅間の再整備計画を進めていった。全体計画では、大小の広場を配置し、乗り換え客による混雑を緩和するために滞留空間を点在させた。また、3市による連携まちづくりの拠点として地域の魅力を発信し、訪れることが目的となる駅前通りに変えるために、「あきつシアタープ

ラザ」を計画した。この場所は、通常時には人びとがさまざまな過ごし方ができる広場となり、イベント時には非日常の時間を楽しむことができる屋外劇場となる。さらに、空き地や駐車場を活用して、駅前広場、地元商店の物販・飲食店、市民センター併設の3市合同のアンテナショップなどが配されている。2駅間のパブリックスペースを地域活動の場として再整備することで、地域住民、乗り換え客、イベント時の来訪者による多様な屋外活動が行われ、豊かな街並み景観が創出されることが期待できる。

(推薦者：下田倫子)



崇城大学 芸術学部
 デザイン学科 プロダクトデザインコース
 宮川黎
 「開かれた美術館の提案
 『熊本県立美術館リニューアル計画』

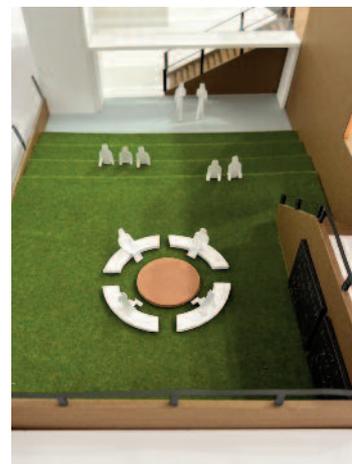
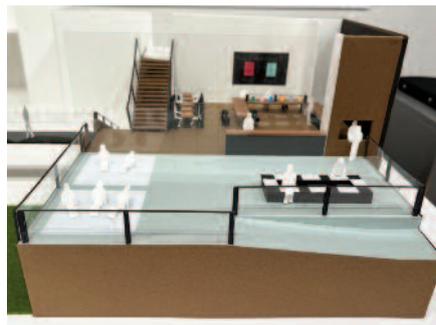
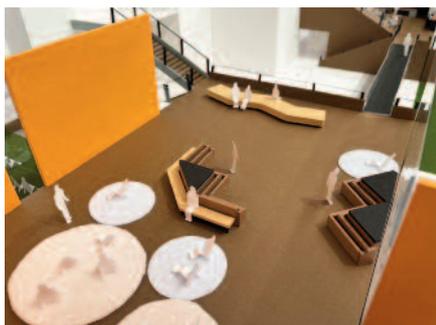
美術館の現状として、入館者数が減少傾向にあるという課題があります。この課題から入館者数を増やす、つまりリピーターを増やすことを研究目的としました。

入館者の方に「また来たい」と思ってもらうためには美術館に展示以外の機能を持たせる必要があると考えました。

熊本県立美術館のリニューアルを想定し、既存の建物のロビー、カフェ、中庭の3カ所の空間をリデザインしました。最初にロビーはミュージアムショップや絵本の読み聞かせ、映画鑑賞会ができる場所にするので、思わず立ち止まりたくなるようにしました。

次にカフェは、テラス席に広いソファ席を配置することで家族や友人と景色を楽しみながらゆっくりと過ごせるようにしました。また、レジカウンターと客席を一体化させてコの字型の席も作ることで、人と人の距離を身近に感じられるようにしました。

最後に中庭はワークショップとコンサートを開催することで、多くの人が集まる活気のある場所になるようにしました。ワークショップは子供向けのアート体験プログラムを計画し、展示にも興味を持ってもらう設えとしました。多様な使用シーンを創出する空間デザインを通して気軽に行くことができる「開かれた美術館」としての在り方を提案し、一人でも多くのリピーターを増やしていければと思います。(推薦者：原田和典)



多摩美術大学大学院 美術研究科
デザイン専攻 グラフィックデザイン研究領域
王璠

「人とまちを『食』で繋げるコミュニティ
プラットフォーム—地域をあげよう複合シ
ェアハウスのブランディングデザイン」

本研究は「食」を中心として、シェアキッチンと農園を設けた複合シェアハウスにコミュニティを構築することを提案し、人とまちをつなげ、地方都市の活性化を図る可能性を探っている。王璠さんは学部で建築を学びグラフィックデザイン実務の経験を持つ。エネルギーに日本の地方都市をまわり実施場所を選定し、自治体担当者や地域の人たちと話をしながら研究を進めてきた。相模原市藤野地区を研究対象とし、シェアハウスを提案、建築デザイン、インテリアデザイン、サイン計画、ブランディングデザインを行った。また、藤野に来訪してもらうプロジェクト「ふじのレシピ」で藤野観光のレシピをつくり、マップやツール



を作成した。ツールは弁当箱型のパッケージにまとめている。相模原市藤野まちづくりセンターの協力を得て2回のワークショップを実施、実施前のインタビュー、

実施後の参加者へのアンケートなどにより成果とした。地域と関わりながら計画から実践展開まで取り組んだことを高く評価している。(推薦者：小泉雅子)

多摩美術大学大学院 美術研究科
デザイン専攻 グラフィックデザイン研究領域
唐亦彤

「診療時におけるグラフィックシンボルの
活用の提案—症状・痛みの表現を中心と
して」

本研究は外国人患者が増加している日本の医療機関における患者と医師のコミュニケーションに注目した。外国人、日本人を問わず、体調や痛みを言葉で表すことは難しい。本研究は患者と医師の診

察時のコミュニケーションの課題にグラフィックシンボル活用の提案を行った。

症状・痛みの表し方について、医療従事者と患者の両方について調べた。調査資料より痛みや症状を表す際によく使われるオノマトペを選び、痛みの感覚を可視化した2Dの図形、触知もできる3Dモデルを制作した。さらに対象を留学生に絞り、患者が自分の症状を伝えるためのピクトグラムカードを作成した。内容は大まかな痛みの範囲、症状、具体的な痛み

併せて、グラフを用いて直観的に伝達・理解できる問診票、人体部位の関係が理解しやすい透明フィルムの人体図、アプリを作成した。研究経過では、医療従事者（校医、保健室看護師、昭和大学×本学メディカルデザイン研究所）に助言を得て、留学生の意見聴取、子供たちへのWSを行っている。提案ツールの医療現場での検証をはじめ、グラフィックシンボルによるコミュニケーションの可能性のさらなる追求を期待している。

(推薦者：小泉雅子)



展示風景

上：痛みの可視化3Dモデル
下：人体図 アプリ

症状を伝えるピクトグラム

筑波大学大学院 人間総合科学学術院
デザイン学学位プログラム 博士前期課程
劉瀟文

「幾何学文様による光の造形表現に関する研究」—— 作品『幾何映光Ⅰ-浮紙生紋』『幾何映光Ⅱ-彩華流光』『幾何映光Ⅲ-秩序之影』および研究報告書

本研究は、幾何学文様と光の関係性に着目し、文様もたらす視覚的秩序やリズムを照明表現へ応用することを目的とした。素材の特性や構造の工夫を通じて、文様と光が交差することで生まれる多層的な造形表現を試みた。

「幾何映光Ⅰ-浮紙生紋」はフロアスタンドとして設計され、美濃和紙の透過性と金属構造の硬質さを組み合わせ、柔と剛の対比による文様の印象を表現した。

「幾何映光Ⅱ-彩華流光」はテーブルライトであり、三層の透明アクリル板に施した同一文様が光によって重なり合い、視点や光色の変化に応じて移ろう多層的な表情を生み出す。

「幾何映光Ⅲ-秩序之影」はウォールランプとして構成され、LEDと鏡素材を

用いた枠内に文様を配置することで、光と影が幾何学的秩序として空間に広がるよう設計された。

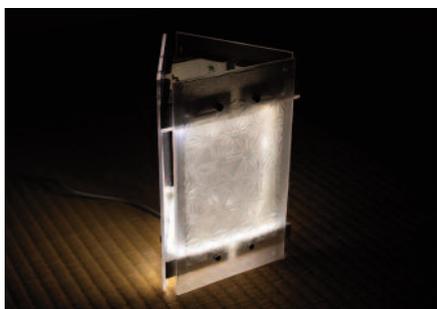
三作品を通じて、幾何学文様が装飾を超越、光と空間のメディアとして機能しうる可能性を提示した。

(推薦者：山本早里)

左：「幾何映光Ⅰ-浮紙生紋」、120mm×138mm×210mm、美濃和紙、金属、アクリル板

中：「幾何映光Ⅱ-彩華流光」、225mm×225mm×380mm、アクリル板、金属

右：「幾何映光Ⅲ-秩序之影」、334mm×240mm×23mm、木材、スチレンボード、鏡、塩ビ板



筑波大学
芸術専門学群 構成領域
佐藤美空

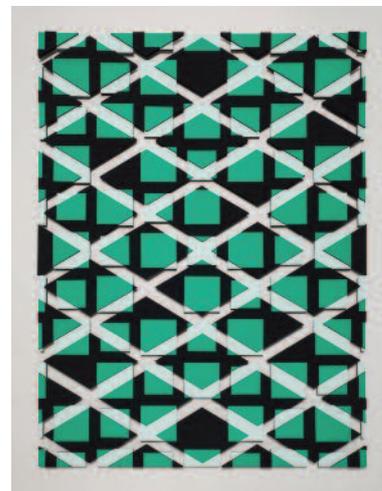
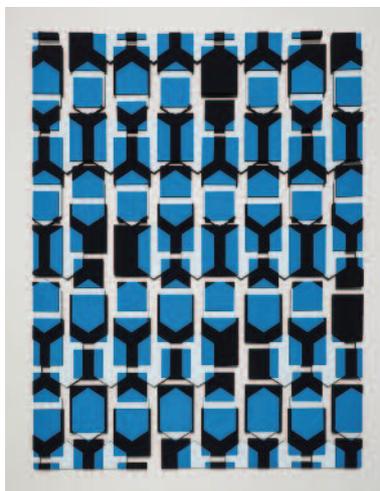
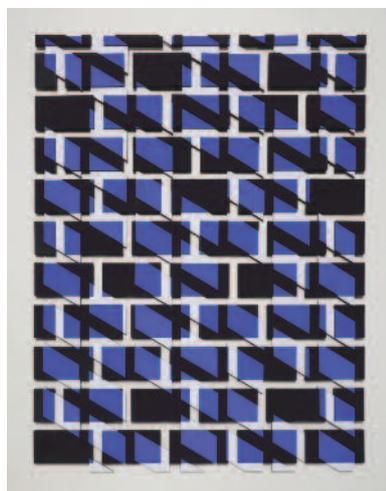
「陰影を利用した立体感の知覚と錯視の効果」

人間は、視覚情報の処理において、網膜から得た様々な奥行き手がかりをもとに立体的な形状を認識している。その中

でも陰影は物体の単純な奥行きを知覚するほかに、物体の形状、物体同士の距離やその遠近を推定するための視覚の手がかりとしても重要な役割を果たす。本制作では、立体物の持つ最大の特徴の一つである陰影を平面作品に落とし込むとともに、色立体視を用いることで立体感を操作し、錯視的な表現を目指した。5mm厚のスチレンボードに平面構成をした後、

重なりのない部分を切り出すことで陰影を作り出す。また、配色ごとに厚みを変化させた凹凸による物理的な層と錯視による層を作り出し、見る角度によって知覚される形を変化させる。このように、立体と平面の境界を曖昧にすることで、奥行きを知覚する過程を複雑にし、立体感の逆転を図った。

(推薦者：山本早里)



左から 浮かぶかたち1、浮かぶかたち2、浮かぶかたち3 各H120cm×W90cm×D5cm

東京藝術大学大学院
美術研究科 デザイン専攻
菅原豪

「壊すことから～都市の改変と手法」

菅原くんは「都心から一番近い森の街」を標榜している流山市に住み、その言葉と現実とのギャップを感じている住民である。そこで本当の「森の街」に相応しい流山市の都市計画提案を作った。それは「森の街」にするためにはどうすべき

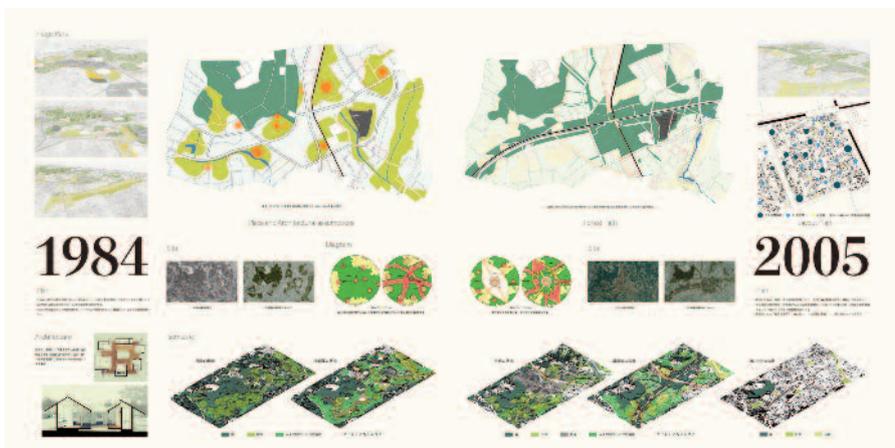
だったのかを過去に遡って計画するケーススタディとしての都市計画である。提案は2つの時期からのシミュレーションになっていて、想定されている時期はまだ開発される前の1984年と、筑波エクスプレスが開通した2005年である。それぞれの時に将来を見越した都市の方向性に気づいていれば実現できたであろう街の姿である。

提案では道路や緑地もまだ自由に計画出来、商業施設を駅前に集中させるので

はなく、住居と混在させて分散させ、あくまで森が身近にある本当の「森の街」の姿の提案になっている。そしてそれが図面パネルではなく、動画によってプレゼンテーションされる。一般の人には理解しにくい都市計画を分かりやすく伝えようという意図でもある。

この提案は今もまだ森が残る流山以外の、これからであればまだ間に合う都市への提案なのだ。今は全国同じルールのもと、経済性のみを考えていけば、全国一律のスタイルになるのは当たり前であり、そうではなく本当のその街の魅力に気づいて計画していけばそうはならなかったはずだという強いメッセージを感じ、私は高く評価した作品である。

https://drive.google.com/file/d/1PwtmMQyrQDowIJCvDEwUx4hpc_RT-p/view
(推薦者：清水泰博)



東京藝術大学大学院
美術研究科 デザイン専攻
江原若菜

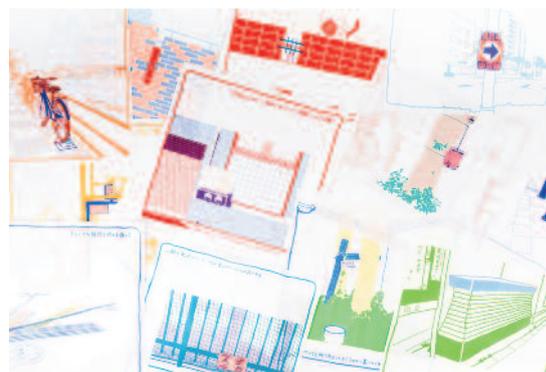
「些細なハンカチーフ」

2年前の学部の卒業制作で、街に見られる庶民的で興味深い景観およそ100景を採集し、それを新聞に載った記事として壁一面のインスタレーションとして表現した江原さんは、今回それを更に推し進めた作品を作った。今回採集した景観は2年前に提示された場所の現在の姿なのだが、

それらをイラスト化しハンカチに印刷している。そこに描かれているのはどれもカッコ良くて目立つ景観ではなく、見逃しそうな目立たない庶民的な街の景観である。そこに普通であれば見過ごしてしまいそうな些細なものを詳細に観察し、人の気遣いや工夫、息づかいを感じている作者がいる。それが彼女のちょっと笑ってしまいそうなコメントと共に表現される。それを彼女は街に住む人や働く人へのエールのように、「心のお守り」として持ち歩けるハンカチにした。ハンカチの

タグにはQRコードが付いていて、そこからその景観の2年前と今が比較できるサイトに飛ぶようになっており、更にそのサイトでは今回制作された街中の愛すべき景観全てが見られるようになっている。

この提案では、作品に共感した人は自分の思いにフィットしたハンカチを購入し、「心のお守り」として持ち歩いていくことになる。都市環境（都市計画）をソフトから考えようとするこの作品は「ハンカチから出来るまちづくり」として高く評価され、東京藝大の台東区長賞を受賞したものである。(推薦者：清水泰博)



文教大学大学院

情報学研究科

武谷龍

「ゲームエンジンを用いたドライビングシミュレータの開発」

本研究は、ゲームエンジン技術を活用し、運転行動の分析を目的とするドライビングシミュレータ開発に取り組んだものである。既存のシミュレータの拡張性やコストといった課題の解決を目指し、ゲームエンジンUnityとUnreal Engine 5を基盤に、地理情報プラットフォーム上に、国土交通省PLATEAUなどのオープンデータ都市モデルや実測位空間モデルを組み合わせることで、実在する道路環境を精緻に再現している。また、本シミュレータでは、自動車や自転車など複数車両が同一の仮想空間上で相互作用する協調型シミュレータとして開発されている。実行時の各車両の位置座標と操作記録は、時系列に沿って出力される。

開発したシステムは、ユーザビリティ

評価や、実車運転との比較実験を通じて、シミュレータの妥当性と忠実性を検証している。さらに、自動車による自転車の追い越し実験を行い、シミュレータ上での事故回避トレーニングが安全性指標を有意に改善できることを示している。

このシミュレータは一般的なPCと入力機器のみで構築可能な設計となっており、



図1：複数車両による協調型シミュレータ



図2：自動車運転席からの視点

今後の自動運転研究やインフラ設計、交通教育など、幅広い分野での応用が期待される。様々な情報技術を組み合わせ社会課題解決に応用した本研究の成果は、特に交通安全分野の発展に大きく寄与するものと評価される。

(推薦者：川合康央)



図3：交差点と信号の制御



図4：PLATEAU都市モデルの利用

文教大学

情報学部 情報システム学科

山口瑠奈

「飲食店の価格帯と評価値を可視化するWebシステム」

本研究は、飲食店の価格帯と評価値データを、三次元地図上で直感的に理解できる可視化システムの開発である。本システムは、WebGLを用いた地理情報システムCesiumJS上に、国土交通省の都市モデルPLATEAUを配置した地理情報プラットフォームを基盤として開発している。この基盤上に、Google Place APIを用いた飲食店の大規模データの収集・処理を行っている。

飲食店の位置は、緯度経度データに基づき四角柱のオブジェクトを配置し、このオブジェクトの色で価格帯と評価値の分布を視覚化している。価格帯は、低から高を緑から赤で、評価値は、低から高を水色から紫で表している。また、飲食店の分布に基づいた店舗群をクラスターと

して計算し、各クラスターの価格帯と評価値に応じた色を表示することで、地域ごとの分布を表している。ここでは、ズームレベルに応じて、ラベルのサイズや位置を動的に処理している。さらに、キーワード検索機能を設け、飲食店の種類ごとの価格帯、評価値の分布も可視化した。本システムは、飲食店の大規模データ

に基づき、価格帯と評価値を色相で表現し、クラスタリングによってエリアの傾向を表す視覚的表現を実現した。本研究は、消費者の意思決定を支援する新たな地理情報可視化技術として高い実用性を持つとともに、都市経済分析など幅広い応用が可能な視覚化手法を確立している。(推薦者：川合康央)

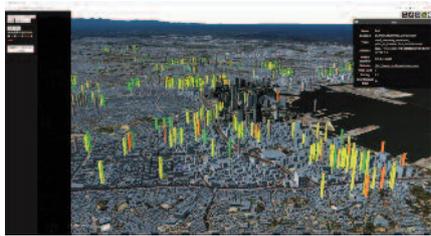


図1：価格帯の店舗毎表示

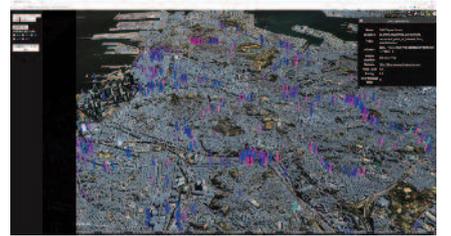


図3：評価値の店舗毎表示



図2：価格帯のクラスター表示



図4：評価値のクラスター表示

名古屋工業大学 工学部
 社会工学科 建築・デザイン分野
 阿部莉々子
 「McTureous 境生の視座」

沖縄と基地の関係性について、私たちの理解は不十分なままである。

今回敷地とするCamp McTureousは基地の境界を越えた関わりがあるものの、言語の障壁や基地内外の高低差から互いの顔を見知れる環境ではない。

提案する語学学校には、沖縄県外から生徒を募集し、現地で暮らしながら言語を学習するSite1に寮、Site2に校舎、Site3

に図書館などの3つの施設を設置し、基地の内外を縫うように生徒たちは3つの拠点で周遊する。

各建築物は、基地の境界に配置し、これまでの柵越しに互いの存在を感じるのではない、新たな交流の形を具現化する。

それぞれの建築に共通して存在する「交流の丘」では屋根をパブリックスペースとして開放し、柵を介さずに互いを認識し、賑わいを広げる場となる。

Site1の「大きな窓」は基地の外の住民を寮に呼び込み、「のぞき窓」にて基地の内からその様子を覗き見ることができる。また、「越境エントランス」では催事の際

に基地の内から住民を呼び込み基地内外の住民や生徒が混ざり合う機会をつくる。

Site2では交流の丘のもとに生徒が言語を学び、中庭となっているテニスコートには終業後、基地内の住民が集う。

Site3の食堂では大きく開かれた開口部は児童館から公園に向かう子どもたちの賑わいを映し出す。これらの語学学校の存在により、生徒たちが沖縄を知り、基地内外がつながり合う未来を願う、想いがこもった作品となった。

(推薦者：伊藤孝起)



福井工業大学
 環境情報学部 デザイン学科
 宮永桃葉
 「カガミモヨウ 景色を纏い、考える」

私たちの日常生活において、環境問題は身近に存在しながらも見過ごされがちである。この鏡の服は、環境問題、特にごみ問題に対する意識を喚起することを目的としている。人々は出かける際に場所に合わせた服を選び、自らの、あるいは友人の姿を写真に残す。無意識に美しいものだけに焦点が合わされ、望まれない景色はトリミングされていないだろうか。作者はこれを問題から目を背ける行為と捉え、作品を通じて新たな視点を提供したいと考えた。ゴミだらけの景色をそのまま映し出し、周囲の環境と自分が密接に結びつくことで、問題意識を持つきっかけとなる服を制作した。また、この鏡の服は、美しい自然や伝統的な街並みも映し出し、いい面も悪い面も「正直に」見せてくれる。



そんなストーリーによって、社会問題への意識を高めつつ、町の賑わいを身に

纏うアイテムが制作された。
 (推薦者：池田岳史)

横浜美術大学 美術学部
 美術・デザイン学科 ビジュアルコミュニケーションデザイン専攻
 望月歩夢
 「スマホ首ビジュアル」

スマートフォン（以下、スマホ）の誕生は我々の生活環境を大きく変えた。Apple社が「iPhone」を発表したのが2007年、それからわずか20年足らずで日本でもスマホの普及率が9割を超えるという。音声通話にとどまらずさまざまな情報収集やSNSなどの文字によるコミュニケー

ション手段や決済までもが1台のデバイスだけでもできるようになった。

作者は過去にスマホを長時間使用したことによる目や首の疲労から何気なく検索した事柄で“スマホ首”について知ったという。しかしおよそ8割の人がスマホ首になっているにも関わらずその認知度はわずか3割と低い現状に作者はとても驚き、作品の制作に至った。

作品のコンセプトは「認知から意識、改善まで」を促すこと。作者が制作の過程で目標としてきたことの一つに誰かのため・世の中のためになるものを制作す

ること、とあり意識で改善できるスマホ首に自身の体験から着目した。

“スマホ首”について検索させるのではなく本の形で周知させることを試みた。ユーモラスなキャラクターたちは誰しものがスマホ首になりうることを示唆している。作者自身がこれまで学んできたビジュアルデザインとイラストによる認知度の向上を確信し、スマホ首を誰もが親しみを持ってわかりやすく楽しく意識できる作品となった。

(推薦者：田崎冬樹)



横浜美術大学 美術学部
 美術・デザイン学科 プロダクトデザイン専攻
 新居ななみ
 「『pipa』 pop up skill toy」

3Dプリンターで出力されたシンプルな筒状のツールで、球を投げ・キャッチし合う、オープンソース型の「スキルトイ」の提案である。

学生自身の学童保育での就業体験から、昔ながらの素朴な「技術を高めて技を競

う」玩具（スキルトイ）が、現代の児童にも親しまれている事に着想を得て、誰もが楽しめる現代的スキルトイのあり方の研究を開始した。

様々な遊び方や形状の試作実験を繰り返し、技術習熟の難易度や楽しさを検討した結果、筒状の単純な基本形状に「3種類の断面形状」と「柔軟性」を持たせる事で様々な難易度を設定することが可能であり、また、身体能力が異なる者同士（児童からお年寄りまで）が共に遊べるバ

リアフリー性・ユニバーサル性も同時に実現した。

多くの説明が不要な単純な遊び方であり、多くの方が受け入れられる単純で美しいフォルムである事、そして、世界中でこのトイを楽しめる様に、データを無償で提供し、今や誰もが安価で購入できる3Dプリンターで製造できる様にした事は、文化の違いを超えた多様性があり、新しいモノの造り方とモノの拡散のあり方を含んだ提案として高く評価した。

(推薦者：山路康文・上綱久美子)



横浜美術大学 美術学部
 美術・デザイン学科 テキスタイルデザイン専攻
 鈴木穂
 「4yr」

「凜とした百合の花の様にありたい」という作者の意思の象徴として中央の百合の花は清楚な存在感を放っている。その花びらは透明感のあるオーガンジー素材にシルクスクリーンプリントによる百合の花のモチーフが描かれ、作者の一番好きな花へのイメージが明澄に伝わってくる。壁面を覆う手描きの原画を活かしたインクジェットプリントによる大きな布絵は、温室の中に居るような自然の暖かさを感じさせる観葉植物のパターンがリズムカルに表現されている。また、床面にはハンドタフティングによるラグが凹凸感のあるテクスチャーを伴い、四方に伸びたマクラメ技法による植物の根とともに空間をバランスよく繋いでいる。「多くの人との繋がり」をテーマとした本作は、鑑賞者の視覚知と触覚知を考察し



た上で多彩なテキスタイル技法を駆使した創造的空間を成立させている。絵画の平面性、半立体の凹凸感、立体が持つ空

間の三要素が調和し、どこにもない場所の不思議な印象を演出している。
 (推薦者: 高瀬ゆり)

横浜美術大学 美術学部
 美術・デザイン学科 プロダクトデザイン専攻
 中島大翔
 「アウトドア特化型の車椅子の制作」

事故などで車椅子を使用することになった人が再びアウトドアレジャーを楽しむための車椅子のデザインである。

アウトドアレジャーの価値とは、普段の都市生活では味わえない自然に触れ、その「慣らされていない」環境での身体体験を楽しむところにあるといっても良い。だが、そうした場所は車椅子の使用を想定していないものが多く、移動する

ことの困難が最大の障壁となる。この研究はその困難に注目し、アウトドア環境を自分で走行できるための車輪構造を模索するものである。

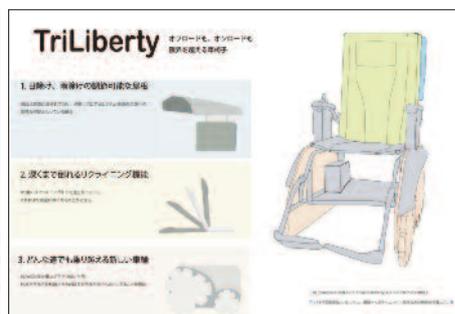
作者は自ら車椅子を購入してアウトドアに想定される様々な行動をテストした。その結果、小回りが効かずわずかな段差で動けなくなるため、通常の走行や、テントのペグを刺す、フックを引っ掛けるといった行為ができないなど様々な課題が発見された。

ここから未舗装路の走破性の改善に取り組み、様々な車輪形状について検証したなかから「ルーローの三角形」を採用

する。その形状を応用した車輪と懸架装置をデザインし、テスト走行を経て改良を重ねた結果でできたのが画像にみるプロトタイプである。

これはあくまで路面走破性に注目したものであり、快適性についてまだまだ検討の余地がある。しかし逆に言うと、そこにはむしろ自然環境そのままを楽しむというアウトドアの価値を車椅子ユーザーにも開こうとする、作者の真摯な想いを見てとることができる。

指導教員: 辻康介・山路康文
 推薦者: 森山貴之



葛西海浜公園 キッズレンジャー

佐々木美貴 (江戸川区子ども未来館)

令和5年6月jssd春季大会において葛西海浜公園(東京都江戸川区)をテーマに「みんなで東京湾葛西沖を考える」オーガナイズドセッションをED部会主催で行いました。その中で、風呂田利夫氏(東邦大学名誉教授)は「最も大きな問題は東京湾の海底における無酸素水塊が、赤潮が発生すると原因となっている」と説明した。その生成の過程は、「プランクトンが死滅し有機物の塊になって海底に沈降する。それをバクテリアが分解する過程で酸素を消費。春の終わりから秋の始めの間表面水温が上昇する時期でも底層水は冷たく、比重差の関係で水が上下に循環しないので、海底では酸素供給がなく、酸欠状態になる。ここはデッドゾーン(Dead zone)と呼ばれ大きな環境問題として国際的にも知られている。東京湾最奥部の千葉港沖から横浜港沖ぐらいの範囲、湾全体の面積の半分ぐらいの海底では夏場はもう生物が住めないデッドゾーンになっている。」と危機感を述べ、この問題の解決のひとつとして失われた干潟の回復が重要であると語っていました。

近年の地球環境の再生機運においても、海洋における生物多様性の重要性が指摘されています。東京湾再生官民連携フォーラム*1は2019年12月、「東京湾パブリック・アクセス方策政策提案“東京湾へGO”」を発表している。東京湾再生のための行動計画(第二期)において、人と海のつながりを回復するため、海辺に行きやすくすることを目標の一つに掲げています。

令和5年の春季大会でのOSやエキスカレーションでの場である、葛西海浜公園は、

水質の悪化や汚染により劣化した「江戸前の海」を多くの人々の努力により回復させた浅海域と干潟が広がっており、平成30年(2018年)にはラムサール条約締結湿地として登録されました。人工の島である2つのなぎさがあり、「西なぎさ」は陸地と橋で結び潮干狩りなどのレジャーとして開放しており、一方「東なぎさ」は自然の推移を見るため立ち入り禁止として最小限の管理としてきました。

現在海浜公園の維持管理は「葛西海浜公園パートナーズ」(以下パートナーズと記す)が指定管理者となっています。

パートナーズが呼びかけて2024年に立ち上げたのが「かさいキッズレンジャー」で、この公園を利用するさまざまな施設、団体やグループ、特に子どもたちが関わるプログラムや活動が一目で分かるようなネットワークです。

野鳥や水生生物などの観察、ごみ調査を通じた環境学習など様々な活動と同じテーブル上で見えるようにすることで相互の連携も促進することを目指しています。

かさいキッズレンジャープログラムとして私は江戸川区子ども未来館の指導員として「いきものマップ」と「ビーチコーミング隊」を担当しています。

5月と10月に行なった「ビーチコーミング隊」は、DEXTE-K(橋爪慶介代表)の西なぎさでの清掃活動(里海エイド)の後に、橋爪氏に海浜公園の経緯とゴミの現状をレクチャーして頂き、その後、参加者と拾い集めた「マイクロプラスチック」を使った万華鏡を筆者指導のもと製作するプログラムです。

里海エイドは、3月~11月の間毎月行われ、台風の後や、夏場にはたくさんのゴ



図1 キッズレンジャー 案内チラシ (2024年度)



図2 ビーチコーミング隊 ・清掃活動ごみの分別 ・いきもの展示と解説 ・橋爪氏西なぎさレクチャー ・万華鏡づくり



図3 いきものマップ ・いきもの採集 ・いきもの解説 ・いきもの絵を描く ・完成したいきものマップと参加者

ミが漂着するので、清掃活動には企業や大学のサークルなど毎回100名近くが参加しています。

5月10月の清掃活動後には、西なぎさに生息している生物を子ども未来館のスタッフ高木嘉雄氏が採集し、展示と解説を実施しました。身近な海に多様な生き物たちが棲んでいることに参加者は改めて驚き、清掃活動の重要性を認識したようです。

万華鏡まで作るプログラムに参加するのは公募で選ばれた小学生とその保護者16名で、かつて江戸前の魚介類であふれていた海が、堤防で仕切られ、公害で汚れ、誰も見向きもしない海になってしまったこと、昔の海を取り戻そうとした先

人たちの努力を伝える橋爪氏の説明に聞き入り、今砂浜に無数に散乱するマイクロプラスチックをどうしたら良いのか、考えながら万華鏡作りに励んでいました。

「いきものマップ」は、西なぎさの陸域と海域の生物を採集しスケッチしマップに記録するプログラムです。講師は自然案内人の中村忠昌氏（自然案内人）と大原庄史氏（NPO法人生態教育センター）パートナーズのパークレンジャーである木村成美氏、江戸川区子ども未来館スタッフ高木嘉雄。私はスケッチ指導を担当しました。9月28日(土)西なぎさに集合。潮が引いているうちに干潟の生物を採集しながら観察。小さなチゴガニを探し巣穴の周りにスコップを当て掘り起こし、

やがて砂の中から1cmほどの小さなカニが見つかる、子どもたちにとっては初めての採集物として、宝物のように愛でていました。次々に発見する生物は大きさもさまざま、そのうちに大きなカニも怖がりながら手で掴めるようになってきました。陸上ではトンボやチョウ、バッタ類も採集し、この日は46種類の生物をマップに記すことができました。

風呂田氏が指摘するように、東京湾の再生にはその構造的な問題も大きいのですが、干潟の役割と重要性を東京湾周辺の市民が理解することで、新たな解決策が導かれるのではないだろうか。その先に江戸前の干潟の復活も夢見ながら。

そのためにも、江戸川区子ども未来館も「東京湾の窓*2」施設のひとつとして、子どもと共にする環境学習をさまざまな方法で行っていきたくて日夜活動しています。さらに連携の輪も広げていけるよう今後も努力を続けていきます。

*1 東京湾再生官民連携フォーラム：東京湾再生に向け、多様な主体の参画による議論の活発化・多様化を図るため、平成25年11月に設立

*2 令和元年12月「未来の東京湾と人のつながりの再構築に向けた「東京湾の窓」施設のネットワーク推進に関する政策提案」を東京湾再生官民連携フォーラムが提出



図4 いきものマップ

石川県 能登半島地震 復興支援ガイドツアー「リブート珠洲」に参加して 上網久美子 (design office kk)

2024年元日に発災した能登半島地震から1年2ヶ月後、能登半島の最奥部に位置する石川県珠洲市の復興支援ガイドツアーに参加した。ガイドツアーに参加して様々な見聞をしたこと、珠洲市内に宿泊したこと、地元住民の話を聴けたことは、マスメディアやSNSから得る情報とは異なり、自分の五感を通して伝わってくるものがあつた。当たり前のことだが、その当たり前の重要性を再確認した。簡単だがその報告をする。

東京から能登半島地震の被災地視察をしたいと思っても、金沢から交通アクセスが悪いこと、復旧工事関係業者以外の宿泊受入れの施設が少ないことなどの理由で訪問が難しかったが、筆者は発災後初めて2024年7月6,7日、能登町宇出津、九十九湾、和倉温泉へ行った。その報告

はEDplace100号に投稿したが、宇出津のあばれ祭と豊島祐樹先生（金沢大学）が所有される宇出津ラボの見学が目的であつた。

その時は叶わなかったが、地元主体の説明で震災後の状況を知りたいと思い、人伝に聞いたりネットで調べて、復興支援ガイドツアー「リブート珠洲」<https://rebootsuzu.com/>の存在を知つた。今回の能登半島訪問は、珠洲市に二泊してそのガイドツアー参加のほか、豊島先生が関わっている「記憶の街ワークショップin能登町小木・九十九湾」の見学を目的に奥能登へ向かつた。

2025年3月4日（火）13:00、珠洲市見附公園でガイド兼主宰者の宮口智美氏と待合せ（写真1）。公園から見附島の震災前からの変わった姿の説明を受け（写真

2,3）、その後、宮口氏の運転するバンで16:30頃まで避難仮設住宅、避難所、被災各地、災害ゴミ集積場、ボランティア仮設宿泊所、飯田港等を廻つた。宮口氏は、2024年元日の発災時は珠洲市観光協会で勤務中で、ご家族は無事だったがご自宅は全壊、珠洲市宝立町小中学校で数ヶ月の避難生活を余儀なくされた（写真4,5）。宮口氏はそこで炊事を担当され、当時の様子や感想を写真ファイルを見せながら説明してくれた（写真6）。避難所での生活管理、係分担、支援物資管理などにも関わっていたという（写真7）。その状況の中、防災士資格を取得、市観光協会を辞めてリブート珠洲の立ち上げに携わつて現在に至る。いまは、坂茂氏設計の避難住宅で生活中とのこと。写真で内部の様子を見せてくれて、外観からの見学をした（写真8-11）。住み心地は良く、できればそこに住み続けたいがどうなるかわからないと言うことだ。

バンで市街地を走る車窓からは、木造民家がぺしゃんこになった状態のまま、電柱や標識が傾いたり折れたりしたまま、



写真1 地図で説明するガイドの宮口氏



写真2
震災前後の見附島
形状の違いを説明
する

写真3
見附島の被災状況を説明する宮口氏



写真4 避難所となった宝立小中学校



写真5 避難所当時の写真



写真6 炊き出し場所となった駐輪場



写真7 避難人数と支援物資の管理表



写真8 坂茂氏設計の仮設避難住宅



写真9 能登瓦の集会所外観

路面が断裂して段差ができたままなどの状況があちらこちらに見受けられた（写真12-15）。それと併せて、2024年9月の豪雨被害の痕跡が生々しく残る地域もあった（写真16）。二重の自然災害に見舞われた被災地の方々の心情に思いを馳せつつも目の前の破壊的な景観を見て思考停止してしまいそうだった。

珠洲市内に3カ所あるうちの一つ、蛸島町の災害ごみ集積場を見た。11項目の分類・分別で、地震により発生したごみみの仮置き場として設置された（写真

17,18）。はたから見ても明らかに木材、金属等の素材ごとに整然と分別されているのがわかる。東日本大震災の時からさらに廃棄物の再利用が進んでいるようだ。近くには、復興・復旧支援業者やボランティアの仮設宿泊所（キャンプ場）がある。バンの車窓から見たただけだが、被災者の避難所生活同様、長く生活するには不自由だろうことは想像できる（写真19-21）。

海岸線沿いの町を走り、宝立町にあるキリコの保管倉庫が被災して3台のキリコ

が壊滅したことを知る。それらを再生するために千万円単位の費用が必要だと言う（写真22,23）。奥能登では、能登町宇出津のあばれ祭を皮切りに、各地でキリコを曳き歩く伝統行事がある。住民たちがキリコを復活させたいことはもちろん言うまでもないことであろう。

奥能登国際芸術祭（2017年～）の舞台でもある珠洲市。今回被災した作品も多い。飯田港にある「さいはてのキャバレー」は、佐渡島との定期船（1981年廃止）の待合室だった建物をキャバレー風に改装



写真10 宮口氏が入居する部屋内部



写真11 共用スペースの机は紙管を使用



写真12 発災直後の様子（宮口ファイル）



写真13 倒壊したままの民家（車窓から）



写真14 亀裂でめくれ上がった駐車場舗装



写真15 真っ二つに折れた電柱



写真16 2024年9月の豪雨災害の爪痕



写真17 蛸島町 震災ごみ集積所



写真18 蛸島町 震災ごみ集積所入口



写真19 仮設宿泊所 案内誘導サイン



写真20 仮設宿泊所機材置きテント



写真21 仮設宿泊所テントサイト



写真22 宝立町キリコ保管倉庫（下）



写真23 高さ14mの宝立町キリコ

して8年前に奥能登国際芸術祭の作品として展示された。その後はイベント会場として使われてきた(写真24,25)。しかし、地震と津波で大きな被害を受け、建物を管理する珠洲市は、港の復旧工事と合わせて解体することを決めた。これに対して、住民の有志は震災遺構として保存すべきだとして市に要望している(註1)。訪れた時の飯田港は、震災で地盤沈下したせいもあるのか満潮で海面がとても近かった(写真26)。当日は曇り空の強風で波も荒れて、めくれ上がった路面とコンクリートの塊の散乱状況も後押しとなり、とても安全な港の景観ではなかったが、さいはてのキャバレーのイルカの壁画がかつての港の風景を留めているように感じられ、そこに居ても大丈夫だと我々に伝えているようだった。震災遺構は東日本大震災の被災各地でも論争があった。地域の財産として、記憶とアーカイブの意味でも当事者間でよく議論し、域内外の後世に伝承できる方法を見つけてほしい。

ガイドツアーは、被災の現状を知ることの他に復興支援として地場産業への経済支援が盛り込まれている。地元の洋菓子メーカー日進堂をはじめとしたお土産屋に寄って珠洲市土産を購入した(写真

27)。日清堂の代表も宮口氏と同年代の女性だという。現地を訪れることはできない代わりに土産品と筆者が見て感じたことと合わせて、宮口氏のような若い人たちが珠洲市のために前向きに活動発信していることを伝え、復興に対する関心の輪が広がることを祈る。

宮口氏は、小学生のお子さんを育てる母親でもあり、被災して避難所生活を通して防災について問題意識を抱かれ、防災士の資格を取得した。そこには、被災者として、女性として、母親として、地域の一員としてなど様々な視点があったことが想像できる。以前は観光客に珠洲市の観光資源を伝える仕事をしていた立場上、「行政による復興は30年かかる。それを待っているわけにはいかない。いまの珠洲を見て知ってもらいたい。」という言葉が力強く印象的だった。高齢者が多い過疎地という理由等で復興が遅れていると言われる中、若い世代の住民は自分たちでできることを模索しつつ将来に向けて生活している。宮口氏はじめ、宿泊した民宿の若旦那、能登町の珈琲屋のオーナーなど今回出会った若い被災者たち皆そうであり、偶然にも互いに知っているようであった。地元を愛して大事に思う気持ちでつながっていると言うのは早

計だろうか。生きる上で人とつながる上で、それは基本的だがとても重要なことだと改めて感じ、自分にとってはさらに能登を応援したいと思う出会いであった。

読者の皆さんもぜひ能登を訪ねて、復興支援ガイドツアーに参加されてみてはどうだろうか(図1,2)。まさしく復興支援になると同時に、デザイン業に携わる者にとっては多様な角度から五感で受信できる意義のある体験だと思う。本ガイドツアーと前後の被災地視察及び前出の「記憶の街ワークショップin能登町小木・九十九湾」見学に環境デザイン部会の佐々木美貴氏と一緒に行動したことは、同じ環境デザインの理念を持つデザイナー同士として大変有意義で、現地での発見・情報収集・出会いが倍増した。感謝の気持ちを表したい。

- ・写真画像は全て筆者と佐々木美貴氏撮影のもの、写真ファイル撮影は宮口氏承諾済み
 - ・写真23は、珠洲市役所観光交流課 GO TO SUZU より部分引用
 - ・図1,2は、宮口智美氏よりぜひ広報してほしいと頼まれたものとしてご紹介する
- 註1：本稿執筆後、珠洲市はさいはてのキャバレーの解体撤去の決定を発表。レポート珠洲もその様子を発信している。
https://rebootsuzu.com/posts/saihate_cabaret/
 (2025年7月26日閲覧)



写真24 被災したさいはてのキャバレー(東側)



写真25 さいはてのキャバレー(西側)



写真26 さいはてのキャバレー前の被災した船着場



写真27 珠洲市の日進堂でお土産購入



図1 珠洲市復興応援メディア「ファイトSUZU」



図2 復興支援ガイドツアー リポート珠洲

追悼——

西川潔先生

小泉雅子（多摩美術大学）



3月末桜の頃、療養中の西川潔先生が旅立たれたと、知人と奥様から相次いで連絡をいただいた。ほんの2週間前に絵画展「西川潔 小品展」(groupQによる企画展)で作品を拝見したばかりだった。

西川潔先生は、1946年生まれ、東京教育大学卒業、同大学院修了、その後、同大学助手を経て、筑波大学芸術専門学群視覚伝達コースの専任講師になられた。視覚伝達デザイン、サイン計画、タイポ

グラフィの研究者として、研究・教育とデザイン実務にあられた。筑波大学では芸術学系長、芸術専門学群長、副学長を歴任され、学外では学会理事や審議会委員などを務められた。環境デザイン部会では黎明期よりのメンバーであった。

私は筑波大学大学院で西川先生のご指導を受けた。豊かな専門性と熱心な指導、そして学生への思いの深い先生だった。日本デザイン学会と環境デザイン部会へ入会したのも西川先生の勧めがあったことだ。在学中は研究とデザイン実務のお手伝いを通じて、公共施設、図書館や病院のサイン計画、印刷物フォーマット作成からデザイン展開まで学ばせていただいた。特に研究、教育、デザイン実務をリンクさせていく西川先生の姿勢が大学教員になる大きな指針となった。90年代に再びつくばで近所の官舎に家族と住むことになり、奥様の陽子様にも大変お世話になった。

昨秋、西川先生にEDplace100号の原稿執筆をご相談したところ、療養中のため

お断りのメール返信をいただいた。西川先生の人柄と部会黎明期当時の様子が偲ばれるメール文を最後にご紹介して、謹んでご冥福をお祈りしたい。

—

小泉さん

久しぶりです。活躍の様子、何よりです。環境デザイン部会の件、忘れられていないことを嬉しく思っています。ただ、執筆は残念ですが、辞退することにします。治療に専念したいので。

当時はえらい先生方のお話を身近で伺えるだけで満足でしたし、芸大の稲次研究室での集まりに参加するのがとても楽しみでした。

皆様にどうぞよろしく。

西川潔

—

西川潔先生（筑波大学名誉教授）

2025年3月25日ご逝去。（享年78歳）

写真は西川陽子様（奥様）よりご提供いただきました。
撮影：ジョン・トラン先生

事務局報告

●2025年度環境デザイン部会総会のお知らせ

下記日程で総会を開催いたしますので、ご参加お願いいたします。

総会決議には全部会員の過半数の参加が必要となりますので、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

出欠については、8月に別途メールにて出欠票（委任状）をお送りいたしますので、必ずご返信ください。

日時：2025年8月24日（日）15:00-17:00

会場：横浜美術大学 3号館21A教室

（横浜市青葉区鴨志田町1204）

アクセス：東急田園都市線青葉台駅下車、東急バス61系統 日体大行「横浜美術大学前（すみよし台）」すぐ

・当日はZOOMにてオンライン参加が可能です。

オンライン参加を希望される場合は出欠表「オンライン参加する」にチェックを入れてください。

Zoom ミーティングに参加する

<https://zoom.us/j/99611422353?pwd=5dWYDGTtXPSwCwXp5sBwQ0LtkGL6i.1>

ミーティング ID: 996 1142 2353

パスコード: 352768

なお総会后、青葉台駅前にて懇親会を

予定しておりますので、ご都合よろしい方はぜひご参加ください。

●日本デザイン学会第73回春季大会 理事会企画オーガナイズドセッションのご報告

日本デザイン学会第73回春季研究発表大会（札幌市立大学、2025年6月27-29日）にて、オーガナイズドセッション

「EDplaceから考える環境デザインのこれまでもこれから」を開催いたしました。現在進めておりますEDplace100号記念企画の紹介と、今後の研究部会活動についてのディスカッションを行いました。

セッションの様子は下記YouTubeリンクよりご覧ください。冒頭の趣旨説明を録画できておりませんでしたので下記に掲載いたします。

<https://youtu.be/dPNa9xd48ow>

趣旨説明

環境デザイン部会は昨年、創立から40年を迎えました。この40年間、時代・社会の変化に向き合いながら、多様な対象について調査研究を行ってきました。また、1985年から発行している機関誌、EDplaceも100号を迎えました。EDplaceの100号分の蓄積には、人間の「環境」の変化とそれに対応すべく実践してきた



春季研究発表大会オーガナイズドセッション

「知」が凝縮されています。

ところでその40年の中で、環境デザインを包括的に理解しようという動きが部会内で度々ありました。それは我々研究部会が一体どこをみているのかを明らかにしたい、という思いでもあります。たとえば学会誌特集号や、2012年に発行した当部会が編集を行なった書籍「つなぐ：環境デザインがわかる」などでは、環境デザインの定義を再考する試みを行ってきました。また直近では、2021年の秋季大会OpenSigで部会メンバーの専門領域を可視化する試みを行い、さらに2022年の春季大会のOSでは『変化“せられる”デザイン～環境デザイン編～』として、時代の変化における環境デザインのありようについて考えてきました。

現在、EDplace100号ならびに活動40周年を記念して、その調査研究の蓄積を広く公開しながら、あらためて研究部会の活動を見つめ直す企画を二つ進めています。まずEDplace WEBアーカイブの公開です。このアーカイブではEDplaceの全バックナンバーをPDFで閲覧できるほか、発行年、記事タイトル、著者、キーワードによる全文検索が可能です（近日公開予定）。並行してWebアーカイブの周知を目的とした展覧会の準備を進めてきまし

た。この展覧会ではEDplaceをベースに、1985年以降の環境デザインならびに部会活動の変遷を紹介します。社会や学会本体との関係性を辿る年表、それを10年ごとのタームに区切って事例やキーワードとともに解説したもの、テキストマイニングによる各時代の傾向分析、マケット、部会関係者のインタビュー映像などを展示する予定です。

こうした試みは、現在の部会員がこれまでの部会活動について自己省察する試みとも言えます。もちろん部会の活動は、時代や社会の課題に向き合いつつ行われてきましたが、それでも都度の構成員や部会主査の関心領域によって影響される側面は否めません。しかしだからこそ、これらの作業をさらに学術的・批評的に検証してゆくことによって、当部会の価値、今後の方向性、そしてその資料体であるアーカイブの活用方法がみえてくるのではないかと思います。

このOSでは、展覧会企画、WEBアーカイブの作成に関わっている4人の部会員に報告していただきながら、研究部会に蓄積された「知」をどのように理解し次代に継承するかを考えます。

●2024年度部会費お支払いのお願い

先の2024年度臨時総会にて、2025年度より部会費を無料とし任意で部会活動参加費を徴収することが決議されました。つきましては2024年度までの会費徴収状況について整理し、未徴収分のある部会員に対して事務局より未払い分の請求書をお送りさせていただきます。

今一度ご確認の上、すみやかにお支払いいただきますよう、ご協力お願い申し上げます。

EDplace